

研究ノート

# ソヴィエト期の 毛沢東の思想と行動に関する一考察

—— 5 次「囲剿」戦の再検討を通じて ——

土 田 秀 明

はじめに

毛沢東（1893-1976）については、いわゆる『歴史決議』（1981年）でその生涯が総括されているが、新中国成立以後、毛沢東は数々の失政を犯してきた。大躍進がそうであろうし、反右派闘争や、とりわけ、文化大革命といわれるものの無残な結末に触れるにつけ、毛沢東はいったいどこでボタンをかけ違えたのか、と思わざるを得ない。あるいは権力とはもともとそうした魔物が住んでいるものなのだろうか、などと考えてしまう。

しかし、本稿で扱うのは、30代後半から41、2歳の青壮年期で、いわば権威に挑む時代の毛沢東でもある。この時代にその直接的萌芽があるのかどうか。それを探ることが本稿の目的ではなく、また、筆者にその力量もない。むしろ、彼の青壮年期の思想と行動を追う中で、いくらかでも、その違いが明確になれば、と念ずるものである。

さて、毛沢東は『中国革命戦争の戦略問題』（1936年）（以下『戦略問題』と省略する）のなかで、1925年からは北伐戦争段階、27年からはソヴィエト戦争段階、36年以降を抗日期として<sup>(1)</sup>いる。ソヴィエトとは、労農紅軍代表が革命指導する権力機関ということであるが、この時期にそのソヴィエトを樹立した、という認識に立つものである。ソヴィエト期（1927-36年）としては、井岡山の闘争から長征の終了までをいうものとなる。

このソヴィエト期の毛沢東の思想と行動は、土地革命を中心にソヴィエト革

命史として論じられてきた。<sup>(2)</sup>しかしこの時期、土地革命だけが行われていたわけではもちろんない。本稿で取り上げるのは、『戦略問題』への関心から、1次から5次にわたる「囲剿」戦、とりわけ5次「囲剿」戦、およびそれと密接に関連する「福建事変」である。まず、「囲剿」戦とは、国民党軍が江西に陣取る共産党・紅軍を包囲して攻め落とそうとする1次から5次にわたる作戦である。ほぼ1930-34年の時期である（紅軍からは反囲剿戦となるが、以下では単に「囲剿」とする）。さて、「囲剿」戦そのものについても、第1次から5次まで、それぞれの戦況についての先行研究がある。<sup>(3)</sup>本稿は、それらを踏まえているが、従来の研究には4、5次における毛沢東の立ち位置についての実証研究はなく、さらに、本稿で取り上げる5次および福建事変への毛沢東の積極的な関わりについては、従来これを否定的に見る議論が行われてきた。先行研究はその都度示すが、以下では5次「囲剿」戦における従来の毛沢東理解を再検討し、併せて、毛沢東の福建事変への関わりを明確にする。この時期の毛沢東の思想と行動の一端を、その行動面のほうから迫ってみたい。

## 第1章 井岡山、1－5次囲剿戦における紅軍の戦略・戦術

1911年の辛亥革命により中華民国が成立したものの、新文化運動（1915年）・五四運動（1919年）を経、国民革命・第1次国共合作（1924年）により、改めて国内統一がめざされた。しかし、志半ばで孫文が死去すると、そのあと、孫文を継いだ蒋介石が、一応の国内統一を果たしたのであった。そして、南京政府により、新国家建設をめざすのであったが、それは同時に、そこまでのパートナーであった共産党を切り捨てる過程でもあった。1927年4月12日の蒋介石のいわゆる上海クーデターを経て、同年7月に第一次国共合作が終結する。一方の共産党も、独自の革命の道を歩むべく、国民党と対決してゆく。先ずは8月に南昌での蜂起に成功し、漢口での、いわゆる八七会議で「秋収蜂起」も決定される。毛沢東もこれを受けて、27年10月、長沙攻撃を指揮することになる。しかしこの蜂起に失敗した毛沢東は、井岡山に立てこもり、ここを根拠地として、以後の国民党軍との戦いに臨んだ。毛沢東の戦略・戦術のいわば原点がここにあることはよく知られている。しかし、毛沢東はその後、井岡山から

福建を経て、1929年はじめ江西省に進出した。ここで改めて根拠地建設を行う。そして、この江西を舞台に、引き続き根拠地を潰しにかかる国民党軍と戦うのであった。こうして井岡山の闘争（1927年）から抗日戦争（1937年）までの約10年、国共の内戦が繰り広げられることになる。

本稿では毛沢東の『戦略問題』（1936年）を取り上げる。この論文はソヴィエト期の戦術・戦略を毛沢東自身で総括したものである。しかし、直接ソヴィエト期に書かれたものではなく、そのこともあってか、江西での毛沢東の言行の真偽がいつまでも問われ続ける。しかし、これを当時の資料（毛沢東・周恩来の軍事関係文書・機関紙・中共中央の文件など）と対照させることにより、ソヴィエト期に毛沢東が5次にわたる「囲剿」戦を、実際はどう戦ってきたかということも、相当程度検証できるのではないかと考えるのである。なお、ソヴィエト期における4次「囲剿」戦の戦略論や、とりわけ毛沢東と周恩来の関係など、まだ不明確な点もあるが、そこへの言及は行論に必要な範囲にとどめ、ここでは、毛沢東の1－5次「囲剿」戦への見方を基本に、福建事変および5次「囲剿」時における毛沢東の立ち位置に集約するかたちで考察したい。毛沢東の「思想」を、まずは「行動」のほうから検証してみるものである。

さて、毛沢東は『戦略問題』のなかで、中国革命戦争の特徴として①発展が不均衡な半植民地であること、②敵が強大であること、③味方が弱小であること、④共産党が土地革命を行って人民を味方につけていることをあげている。<sup>(4)</sup> 敵が強大であり、味方が弱小である、というのは『矛盾論』に結実するフレーズであり、毛沢東の思想をコンパクトに言い得ている。因みに、①は「赤色政権はなぜ存在できるか」<sup>(5)</sup>から引き継ぎ、②③も同書の発展形であり、④の原型も井岡山にあるといえようが、人民を強調するところにソヴィエト期の特徴がみえる。要は弱小集団が、強大な集団を倒すことができる、というダイナミズムに毛沢東の思想をみることができる。『戦略問題』では、国民党との「囲剿」戦を5段階ないし3段階の時期区分―戦術的には5段階、戦略的には3段階―に区分していた。<sup>(7)</sup> 井岡山に原点をおき、1－3次「囲剿」は撃退に成功したが、4次「囲剿」は満洲事変以後の日本の熱河進攻もあり、国民党が「囲剿」に集中できなかったため、紅軍はなんとか反囲剿には成功することになる。しかし、

5次「囲剿」戦に敗れ、西遷（長征）せざるをえず、延安で改めて、以前の方針を復活させようとした。<sup>(8)</sup>

このうち1次（1930年12月）、2次（1931年3月）、3次（1931年7月）「囲剿」戦までの戦術に直接つながる井岡山時代の戦術は、「敵が進めば我は退き、敵が占領すれば我は乱し、敵が疲れば我は打ち、敵が退けば我は追う」（原文は「敵進我退、敵拠我擾、敵疲我打、敵退我追」）という「16字訣」であった。<sup>(9)</sup>そして、この「16字訣」は「囲剿」戦のなかでさらに発展をみせる。「敵を深く誘い込む」（『毛沢東集』第5巻125-6頁）、というフレーズに象徴される“戦術”である。そして、弱小集団でも強大な集団を倒すことができるという“戦略”を、「16字訣」—「敵を深く誘い込む」というフレーズに象徴される“戦術”が支えてきたことがわかる。このことは、軍隊の人数・規模の点からも象徴的に語られる。すなわち、毛沢東の“戦略”は「一をもって十にあたる」もの。しかし、そこでの個々の“戦術”においては「十をもって一にあたる」ものとなる。十倍の敵に対して、敵をその百分の一ずつ個別撃破してゆこうという理屈になる。こうした戦略・戦術を、毛沢東は「相反し相成る」道理と表現し、「われわれが敵を制する法則のひとつである」という（『毛沢東集』第5巻152頁）。弱小の紅軍が強大な国民党軍に打ち勝つ、という戦略が成功するには、ソヴィエト区へ「敵を深く誘い込」み、兵力を集中し、その絶対優勢の勢力で、しかも奇襲戦法<sup>(10)</sup>で分散した少数の敵に勝つ、という戦術＝必勝パターンを展開する必要がある。ここに弱小集団が強大な相手に打ち勝つという、『矛盾論』『持久戦論』につながる毛沢東の戦略論がある。いずれにしても、こうした戦略・戦術が有効だったのは基本的には3次「囲剿」までであった。

## 第2章 毛沢東の見る第4次「囲剿」について

1－3次「囲剿」戦において、紅軍は前章でみてきたとおりの戦略・戦術で、国民党軍との戦闘に勝利してきた。<sup>(11)</sup>しかし、第4次「囲剿」においては、行動方針を討議した中央局全体会議、いわゆる寧都会議（32年10月）で、毛沢東流の遊撃戦が批判され、戦争指導の責任者である総政治委員も、毛沢東から周恩来にかわり、戦術も遊撃戦から正規戦の、いわゆる「積極路線」への転換も行

われた、とされる。しかし、周恩来が「積極路線」を指揮した、というのは正しいのだろうか。<sup>(12)</sup> 5次「囲剿」戦の状況を把握する意味でも、この事実関係を検証しておきたい。

第4次「囲剿」戦の実質的な戦いは、1933年1月以降、すなわち、33年1月の黄獅渡、2月の南豊での第4次「囲剿」戦からである。周恩来はこの時期、ソ区中央局の指示に従い、重装備・守備堅固の南豊を攻めるのであった（2月4日）。<sup>(13)</sup> ここでいうソ区中央局の書記は周恩来である。しかし、周は前線に出て朱徳とともに指揮をとっており、<sup>(14)</sup> 実際の命令は、上海から移ってきた総書記秦邦憲（博古）・中央政治局委員（書記）張聞天（洛甫）の中共中央（当時は臨時の機関であり、以下「臨時中央」とする）、政治史などでいういわゆる「ロシア留学生派」であった。周は指示どおり南豊を攻めるのであるが、攻め切れない。南豊は、国民党軍の駐留する樂安－宜黄－南城の西－東のラインから40kmほど南の、ソ区側に突き出て位置している。そして、この2月時点での紅軍主力部隊は、その南城－南豊の北－南ラインの東側、すなわち江西・福建に跨る建寧・黎川・泰寧（建・黎・泰）<sup>(15)</sup> に開いた「新ソ区」において、そこから、国民党軍が前線基地南豊郊外に、地形を利用して築いた保壘群を包囲するかたちで「積極路線」に出ているわけだが、攻めきれない。そのうえ、国民党軍はそこを守って増援を待つ構えとみた。そして、そのとおり増援部隊（中路軍：総指揮陳誠）は南城と金溪から進撃を開始（2月12日）。そこで周は、紅軍主力がさらに南豊を強襲するとみせかける「佯攻」（偽装攻撃。以下「偽攻」と省略する）<sup>(16)</sup> に切り替えるのであった（2月13日）。

2月14日増援部隊（その第2・3縦隊）は南豊に「猛攻」を仕掛ける紅軍を挟み撃ちすることをねらって進撃。<sup>(17)</sup> しかし紅軍は、猛攻、即ち「偽攻」のあと、南豊と南城の中間にある新豊街で渡川（盱江）し、さらに東進して黎川（新ソ区）に移動する。それをわざわざ国民党軍にみせている（「迷惑」させている）のである。しかしその間、朱徳によれば、主力をまず「南進させ、さらに西進に転じ、迅速に目的地（東韶：筆者）<sup>(18)</sup> に達」した。紅軍は東韶にひそかに集結したのである。そして南進する増援部隊（その第1縦隊）を、<sup>(19)</sup> いわば深く誘い込むかたちで狙うのであり、黄陂戦役（2月27・8日）でその第52師（李明）

第59師（陳時驥）を殲滅した。<sup>(20)</sup>

52・59師は、国民党中路軍3縦隊のうちの西側、楽安付近の第1縦隊（羅卓英）である。主力は東側の第2（呉奇偉）、3縦隊（趙觀濤）。第2縦隊は南城—南豊に、第3縦隊は金溪という、やや後方（北方）の位置にある。この2・3縦隊を南豊にひきつけておいて、3縦隊のうちもっとも手薄なこの第1縦隊を狙ったものである。東韶に主力の兵力をこっそり集中させ、敵の主力を狙うのではなく、手薄な部分を狙って成功しているのをみれば、毛自身は前線から外されたとはいえ、毛沢東流の「敵を深く誘い込む」、従来どおりの遊撃戦が戦われたのである。<sup>(21)</sup>

4次「囲剿」戦においては、寧都会議以降、確かに毛沢東自身は軍務を外される。「囲剿」戦も「積極路線」が指示されるようになった。しかし、4次「囲剿」戦の現場では、基本的に毛沢東の「敵を深く誘い込む」戦術そして戦略が維持されていった。実際に戦闘を指揮したのは総政治委員の周恩来であり、紅軍総司令の朱徳ではあったが、それをプロデュースしたのは、象徴的にいえば、やはり毛沢東だったのである。しかしこれは「臨時中央」が何としても認めたくないことであった。当時の『紅色中華』主筆沙可夫（陳維敏）は前線からの電報を受けてすぐに、これを「積極路線」の百パーセントの正しさを証明しているとまくし立て、秦邦憲も「遊撃戦臭さは徐々に克服され、個人の天才的作戦指導依存から世界的な新たな戦略と戦術の指導を採用することに変わった」と述べる。<sup>(22)</sup>これは4次「囲剿」戦が遊撃戦だったとみていることの証左である。新たな戦略・戦術を取るために、「天才」の指導から脱却することこそが目標だったのである。「臨時中央」は、毛沢東の功績を認めては、来るべき第5次「囲剿」を「積極路線」で戦えないという、結論が先にあった。4次「囲剿」戦にみるべきは、そのような内部対立の構図である。<sup>(23)</sup>

### 第3章 5次「囲剿」における毛沢東の軍事・行政上の位置

さて、国民党軍は33年10月（34年1月）に第5次「囲剿」戦を開始する。<sup>(24)</sup>5次「囲剿」で国民党軍は、4次までの戦法をかえて、いわゆるトーチカ（保塁）をつくって囲い込む作戦にでた。この時の兵力は、国民党軍北、西、南路



軍約70万人、このうち実際参加したのは40万人。これに対する紅軍は、第1，3，5軍団など15万人、うち実際参加したのは10万人とみられる。<sup>(26)</sup>

40万の国民党軍に対して紅軍は1/4の勢力で正規戦、すなわち毛沢東が『戦略問題』でいう、いわゆる「軍事平均主義」で挑んで敗北し、西遷、いわゆる長征に出ることになる。毛沢東は『戦略問題』で、次のように総括している。

軍事平均主義は、1934年の5次囲剿のとき極点に達した。「六路に兵をわけ」「全線防御」で敵を制することができると思いこみ、結果は敵の制するところとなった。原因は土地を失うことを恐れたことにある。主力を一つの方向に集中し、その他の方向にはおさえる力を残しておくにしても、当然土地が損失を受けることを免れない。しかしこれは暫くの局部的損失で、その代価は突撃方向で勝利を得ること。突撃方向で勝利を得れば、おさえる方向での損失を回復できる。1，2，3，4次囲剿は土地の損失を受けた。特に3次囲剿のとき、ソヴィエト区全部を失った。しかし、結果はみな回復したばかりでなく、土地を拡大した。ソヴィエト区人民の力がみえないので、紅軍がソヴィエト区を遠く離れることを恐れる誤った心理が生まれる。(中略) 兵力を集中する法則は、トーチカ主義に勝つ工具である(『毛沢東集』第5巻152-154頁)。

軍事平均主義は、毛沢東と紅軍が得意とした遊撃戦の対極にある戦術・戦略であるが、1934年の5次「囲剿」のとき、極点に達したとする。「六路に兵をわけ」て敵を「全線防御」できるというのは思いこみであるとするが、その原因は、紅軍指導者に人民の力がみえず、土地から離れることを恐れたことにあるとみるものであった。紅軍が兵を分散させるのは土地に固執することからくるもの。毛沢東は、兵の集中こそが敵のトーチカに対しても有効であったはず、と訴える。

寧都會議(1932年10月)以降、毛沢東は軍事面から降りていとされる。実際そのとおりだったのだが、34年当時において、軍事面に関わる毛沢東名義の発言も多いし、<sup>(27)</sup>毛沢東は軍事委員会には出席しているのである。<sup>(28)</sup>従来は、軍事から外されていたとされる毛沢東が会議で発言するということの真偽問題が先に立ち、後の理解を妨げた面もある。日本における研究としては、かつて蜂屋

亮子氏が軍事組織面から詳細に検討されたことがあり、姫田光義氏の研究もあるが、ここでは、さらにその後の中国での研究に依拠して、中央軍事委員会と中革軍委（中央革命軍事委員会）などの軍事組織の関係を改めて整理するところから、軍事面の一端を考察しておきたい。

1931年6月に中央政治局の向忠発が捕まり、また王明はコミンテルンへ（10月）、周恩来はソヴィエト区へ（12月）、それぞれゆくことになったが、その前にコミンテルンの提案で上海に残る秦邦憲・張聞天らが組織したのが「臨時中央」（1931年9月中旬）<sup>(31)</sup>。この「臨時中央」が上海を離れ瑞金に移るのが1933年1月であった。

「臨時中央」が瑞金に移ってから「ソ区中央局」との合併が日程に上った。ただ、「臨時中央」は瑞金の西南5キロの沙洲壩に居を構えたのであるが、ソ区中央局ないしソヴィエト政府はこの時点ではまだ瑞金の東北6キロの葉坪にあり、完全な合併は1933年4月下旬-5月上旬であった。<sup>(32)</sup><sup>(33)</sup>

本稿で確認したいのはここからである。この1933年5月から34年2月まで、項英が主席代理となった。項英にとっては二度目の役職であるが、それはここでの問題ではない。問題は、この時の主席は朱徳のままなのであるが、この33年5月、5次「囲剿」をまえに、朱徳が事実上「中央革命軍事委員会主席」を下ろされている—朱徳は前方へ残り、中央革命軍事委員会（以下「中革軍委」と省略する）は瑞金、すなわち沙洲壩に移ったのである。<sup>(34)</sup>この時点で、中革軍委に一本化された。ただそれでも、敵前の周恩来—朱徳体制が消滅したわけではなく、しばらくは瑞金とは別に敵前（前方）に従来の組織は存在していたとみられる。<sup>(35)</sup>もちろんその場合、中革軍委は一本化しており、紅軍全体の方針は、中央ソ区を包囲する国民党軍に対し、文字通り「城門の外に打って出る」もの。すなわち「六路」にわけて、当時「臨時中央」の顧問だったオットー・ブラウンの指導する「短促突撃」（後述）に打って出るものになっていた。実は、4次「囲剿」が一段落した33年5月時点での周恩来の発言をみると、それを先取りするかのように、これまで自画自賛していた遊撃戦を、唐突に否定する内容になる。<sup>(36)</sup>「臨時中央」体制が固まるこの5月前後が、「積極路線」への実際の転換点だった。



そして、ブラウン自身も33年10月以降ソ区入りし、5次「囲剿」戦を指導した。<sup>(37)</sup>ここでの朱徳の地位の相対的低下は明らかである。ただし、中革軍委は一つになったとはいえ、組織は二枚看板になっているのである。すなわち、蒋介石との第5次「囲剿」戦を戦うのは臨時中央の指導のもとにある革命軍事委員会主席朱徳（主席代理：項英）の指揮下（実際はブラウンの指導とされる）においてである。しかし、この時期、指揮権を奪われている朱徳自身は工農紅軍革命軍事委員会主席として、中華ソヴィエト共和国中央政府主席の毛沢東と連名で、福建人民政府と（ただし秘密裡に）「反日反蔣初步協定」<sup>(38)</sup>（1933年10月26日付）を結ぶのである。

実は、ブラウンの登場（33年10月）から、項英が主席代理を降りる（34年2月）までの時期がちょうど福建事変とかさなっている。すなわち福建政府とソヴィエト政府の密約から公表までが、ちょうど、33年10月から34年2月という、裏腹の関係でもある。

この時期コミンテルンにいた王明の論文をみると、王明は「革命、戦争、武装干渉と中国共産党の任務」で、ソヴィエト政府と紅軍の戦いを称賛するなかで、リアルタイムで起きている福建事変に触れ、19路軍がかつて上海で英雄的に抗日民族防衛戦を戦った軍隊であり、中国民族解放運動史の輝かしい一頁であること、そして今まさに起こされた事変が決して孤立無援でないこと、これが引き金になって広範な反蔣反日の民衆運動が起きるにちがいないことを訴えるのである。<sup>(39)</sup>このことは後の「新条件と新政策」でも、福建事変そして19路軍の進攻が紅軍の反蔣反日の友軍であったこと、紅軍と19路軍がともに誤りを犯して、共同の勝利を獲得することができなかったことを言う。<sup>(40)</sup>この時期における王明の評価は、常に「左翼冒険主義」というレッテルがついてまわる。強いといえば、それは秦邦憲などの“王明一派”、いわゆるロシア留学生派という括りであって、この時期の王明自身には、逆に毛沢東との呼応・連携をみることができる。<sup>(41)</sup>また、ブラウンによれば、その秦邦憲・張聞天さえも、その「成功」に満足していたという。<sup>(42)</sup>とすれば、周恩来・朱徳はもちろん、王明・毛沢東、秦邦憲・張聞天までも、温度差はあれ、一致して福建政府との協議を支持していた、ということになる。朱徳（毛沢東）を軍権から外したとはいえ、

「臨時中央」は基本的に彼らの締結する協定を支持する立場であった。ただ、問題は逆に、毛沢東だけが反対していたという見解があることである。以下で福建事変をみるなかで、このことを検討しなければならない。

## 第4章 福建事変と「反蔣反日初步協定」について

5次「囲剿」戦のなかで展開した福建事変（1934年11月）そのものについては、すでに先行研究がある。<sup>(43)</sup> 基本的には福建で国民党第19路軍が国民党に反旗を翻し、福建政府を樹立。しかし半年で崩壊したものであることを教える。本稿ではこれを毛沢東の関わり、という点で考察し直したい。そのために、その前史として、蔡廷鍇が率いた国民党第19路軍の動きから追ってみたい。

国民党第19路軍は、江西では紅軍の敵であった。<sup>(44)</sup> 国民党軍が劣勢のなかで19路軍は広東から北上してソ区に切り込み、満洲事変までの時期、互角以上に戦い紅軍にその存在を認識させている。なお、蔡は満洲事変以後の「国難」において、南京・広州・汪派と分裂していることを憂い、<sup>(45)</sup> 年末には東北への援軍として「西南国民義勇軍」を率いることを志願している。<sup>(46)</sup> そして、上海事変（31年12月8日）で唯一日本帝国主義に反抗したのが19路軍であった。蔡はもともと上海で満洲事変以降の「北上抗日」の準備を進めていたが、上海事変に遭遇して部隊を率いて抗日戦を戦った。4月に停戦成立する（5月5日正式に成立）が、蒋介石から、以後政府命令に絶対服従を言い渡される。しかし、軍人として国家民族の前途を憂えて、国家の自由のため抗戦した矜持を示す。<sup>(47)</sup>

なお、蔡は19路軍の総指揮として福建省漳州に赴任するが、満洲事変・上海事変を経、蒋介石・汪精衛ら、開戦当時の政府の煮え切らなかった態度も含め、誰が真の「抗日」なのかということに思いを致すのであった。その間、日本の熱河進攻（1933年春）、塘沽協定締結（5月31日）。日本が事実上東北を占領する。<sup>(48)</sup> 蔡も北上を試みるが、果たせないまま、一方で蒋介石の懐柔工作に対応しながら一逆に言えば、蒋介石は19路軍を福建に派遣し紅軍との「両敗俱傷（共倒れ）」を狙ったもの一、<sup>(49)</sup> 他方で紅軍との提携を模索することになる。

実は、少し時期は前後するが、19路軍は、1932年11月（15日）に紅軍学校に招かれている。そこで19路軍は、自分たちが上海で日本とどう戦い、また国民

党からどう圧力をかけられたかを話し、逆にまた、彼らを描いた紅軍の劇の上演を見ている。<sup>(50)</sup> 19路軍と紅軍とのパイプ、紅軍の19路軍への有力な支持勢力の存在をうかがわせるのである。

19路軍は、一方でそうした紅軍の支持と、称賛を受ける。しかしその一方で、紅軍からその後の龍岩や新泉での徴税を批判され、蔣介石の手先とみられもするのであった。<sup>(51)</sup> さらに両者の武器使用による小競り合いもみられる。<sup>(52)</sup> 関係は複雑で、時系列でみると、紅軍の方針がブレているようにみえるし、一義的に両者の関係を（例えば友軍というようには）規定できないことがわかる。そしてさらに、19路軍は33年7、8月に、避けたかった紅軍と戦うことにもなるのであった。相手は紅軍第3方面軍の彭徳懷である。ここで大敗を喫することになる。<sup>(53)</sup> そして、9月を迎える。1933年9月上旬、福建延平付近で、北と西からの紅軍の攻撃を守備。その一方で、秘密裡に紅軍と接触をもつ（9月中旬）。仲介は、延平で19路軍と対峙した、上記紅軍第3方面軍の彭徳懷である。ただ、そこでの主要な会談内容が、福建西部での境界問題で、蔡は紅軍と共同で「反蔣抗日」をすすめる「攻守同盟」を結びたかったが、理解されなかった、としている。<sup>(54)</sup> 互いにいくらか齟齬のあったことが窺われるのである。

ところで、当初19路軍は紅軍と戦ったものの、和解を模索してゆくようになる。そのきっかけが、「臨時中央政府労働紅軍革命軍事委員会宣言」（1933年1月17日）だったとされる。上記32年11月の紅軍との接触はともかくとして、改めて、そこから「協定」まで辿り直してみたい。この宣言では、国民党軍に抗日を呼びかけたが、その答えは労働政権と軍隊に対する攻撃であったこと。そして上記の呼びかけは、中国労働紅軍が、「如何なる武装部隊とも作戦協定を結んで、日本帝国主義の侵略に反対する準備がある」という、武装部隊への作戦協定の呼びかけ、というものである。<sup>(55)</sup> 宣言の内容は次の三つであった。

- （1）ただちにソヴィエト区域への進攻を停止する。
- （2）ただちに大衆の民主的権利（集会結社言論ストライキ出版の自由など）を保証する。
- （3）ただちに民衆を武装させ武装的義勇軍を創設し、中国を防衛しおよび中国の独立統一と領土の保全を勝ち取る。<sup>(56)</sup>

紅軍は半年後に改めて呼びかけている。その「全世界労働農民に告げる宣言」(1933年9月6日)<sup>(57)</sup>が出て、再度「三条件」が提示され、作戦協定を呼びかける。呼びかける相手は、同胞・兄弟である国民党軍兵士である。従って、ここではねらいにも若干違いがあり、1月の宣言の時の「三条件」とは多少文言にも異動があるが、ともに連携したい「国民党」の捉え方の差異であり、ここでは立ち入らない。いずれにしても、上記のふたつの「宣言」で提示された「三条件」は、以下で見る「反蔣反日初步協定」(1933年10月26日)の協定内容と重なる。もともと「宣言」を実現するために「軍事同盟をすすめる」準備として、以下の「反蔣反日初步協定」が結ばれるのである。「協定」は次のようにいう。

中華ソヴィエト共和国臨時中央政府および労働紅軍と福建省政府および19路軍双方は、中華民国の滅亡を救い、帝国主義の中国植民地化の陰謀に対し、並びにソヴィエト政府および紅軍の数度にわたる宣言を実現するために、反日反蔣の軍事同盟をすすめる準備をする（「反蔣反日初步協定」『紅色中華』第149期1934年2月14日）。

この協定は、紅軍の呼びかけに応えるというものであるが、基本的には、ふたつの政府の停戦協定あるいは相互不可侵協定である。<sup>(58)</sup>

ここでは、19路軍のほうでも「反蔣抗日」を掲げていたのに、それを呼びかけたはずの紅軍は同盟にまでは同意していない。軍事同盟の「準備」段階とするのである。そのため、この段階での紅軍あるいは毛沢東は「抗日」に熱心でなく、<sup>(59)</sup>「慎重待機論」だったとも、秦邦憲など王明一派は既定の方針を盾に接見を拒否したために、協定は「外交文書」にすぎないものとなったともされるのである。<sup>(60)</sup>両方とも慎重論・消極論になってしまうが、協定に対する毛沢東の態度、という観点からみれば、一方が慎重論、(他方も秦邦憲は消極論だが)、毛沢東の立場は積極論となる。こうした見方の相違はどうしておきるのだろうか。もともとの資料そのものはどうなっているのだろうか。

そこでまず注目したいのは紅軍から福建人民政府と19路軍にあてた電報である。朱徳と毛沢東の連名で出された「中華ソヴィエト臨時政府の福建人民革命政府および19路軍への第一電」には、協定を結んで1か月以上たつのに「反蔣

反日」に何の行動もとっていない、と行動を促すものである。<sup>(61)</sup> そのなかで、われわれソヴィエト政府と労農紅軍は如何なる時でも君たちと連合し、君たちと作戦の軍事協定を締結して我々の共同の敵—日本帝国主義と蔣介石の南京国民党政府に反対しこれを打倒する準備がある……（12月20日）。  
（『紅色中華』第149期1934年2月14日）

まずもってこの資料は、さらなる軍事協定の締結の呼びかけである。それは、1月13日付けの「第二電」にもいえる。

貴政府がほんとうに反日反蔣の主張を貫徹しようとするなら、われわれの……提起が目下の人民政府と19路軍を瀨戸際で救う唯一の路であり、また貴政府が自己の責任を負う宣言と協定で許諾したことに対して結局のところ実現するかしないかの決心があるかどうかの最終試験である（同上）。

19路軍に対して、再度「反日」「反蔣」行動を促すものである。ここで「最終試験」というのは、19路軍の反蔣の本気度をやはり“試している”という建前であることがわかる。いずれにしても、19路軍に決起せよという。しかし、19路軍は蔣介石に対して優柔不断な態度をとっているうちに追い込まれて、崩壊寸前の状況であった。<sup>(62)</sup> 一方、毛沢東はもちろん朱徳は何をしていたのだろうか。先のオットー・ブラウンの登場（1933年10月）によって実質的な軍権を奪われており、思うように動けていないのは確かである。因みに、当時紅軍は二つに分かれ、主力は国民党軍が永豊（江西省）に築いたトーチカ攻撃に移動し、一方で紅3軍は建・黎・泰の新ソ区付近で国民党軍と対峙していた。これが毛沢東のいう「二つの拳」のうち、「一方は無用で、一方は非常に疲れる」状況であった（『毛沢東集』第5巻151頁）。<sup>(63)</sup> その後者の方では、33年12月12日の黎川東南の団村での戦闘で、福建に向かう国民党軍を破る。しかし、それも紅3軍団の一部をこれに充てただけの部分的な勝利であった。当時の中革軍委の命令は二転三転して、その命令も現場に届くのが遅滞する混乱状況である。なによりも各軍団がばらばらで相互の連絡さえ取れておらず、周恩来は現場に全権をと訴えるのであった。<sup>(64)</sup> ところが20日には逆に「前方総部」は撤収された。<sup>(65)</sup> そんな兵を動かせない状況で、毛沢東は、先の電報（第一電）で19路軍にさらなる軍事協定を呼びかけるのである（12月20日）。現場でもその19路軍の状況は把

握できておらず、この段階でまだ「政治工作」しようとするのが実情である。<sup>(66)</sup>準備不足は明らかであるが、いずれにしても、19路軍にだけ期待するより、やはり紅軍がこれに呼応して動くしか展望がなかった、と毛沢東も考えていたはずなのである。毛沢東はこの5次「囲剿」について、『戦略問題』で次のように総括している。

囲剿がすでに内線では解決する方法がないことが証明されたときには、紅軍の主力を使って敵の包囲攻撃戦を突破し、味方の外線、敵の内線に転入し問題を解決すべきである。トーチカ主義が発達した今日、こうした手段が通常の手段となろうとしている。5次囲剿が進行して2カ月のち、福建事変が起きたとき、紅軍の主力は浙江を中心とした蘇浙皖贛地区に疑いもなく転じ、縦横に、杭州、蘇州、南京、蕪湖、南昌、福州の間を馳せ回り、戦略防御を戦略進攻に変えて、敵の根本要地を威嚇し、広大な保塁のない地帯に作戦を求め、ソ区に進攻する敵を根本要地の援助に戻らざるをえないようにするべきであったのであり、こうした方法でそのソ区への進攻を粉碎し、あわせてこうした方法で福建人民政府を援助し、かつはつきりと人民政府を援助すべきであった。この計画を用いないので、5次囲剿は打ち破れず、人民政府も倒れるしかなかった。（『毛沢東集』第5巻164-5頁）。

遊撃戦は「戦略防御」が軸になる戦法である。しかし、ここでの浙江転戦を、戦略防御の次のステップである「戦略進攻」と位置づける。<sup>(67)</sup>それと同時に、それによって紅軍が遊撃戦に出、福建政府と呼応することで国民党軍を粉碎する契機をつかみたかったのだが、まったく動けず、福建政府を孤立させてしまったともいう。もともと「協定」を建前だけとするのは、秦邦憲など「臨時中央」の立場を示すものではあっても、毛沢東のものではない。むしろ、毛沢東が福建政府を援助する気がなかったとか慎重であったという説こそ、再考してみる必要があろう。例えば、『戦略問題』執筆以前の「長征」途中の、いわゆる遵義会議をみると、たしかにこの19路軍を反革命と規定している。しかし、指導部が福建人民政府の存在が導く有利な条件をまったく理解しないために、<sup>(68)</sup>みすみす貴重な機会を永久に逃してしまったと断罪している。それに、遵義で



の決議は、5次囲剿前後から長征期初期の戦術の誤りを逐一指摘するものである。遊撃戦を是とする立場からは正規戦を否定するのは当然であるし、福建事変についてみれば、中共中央（さらにはコミンテルン）までも取り込んでおり、シニカルな言い方をしているが、実は一貫して、毛沢東が19路軍・福建人民政府を評価したことがみてとれる。<sup>(69)</sup>ことほどさように、結果から見れば、それらの示すとおり「福建事変」であった。ただ、遵義は事後の総括であり、そこで取り上げたいのは、リアルタイムで毛の敵対者として現われるブラウンであり、彼の指揮による、実際の紅軍の戦闘をみれば、遵義の総括、そして毛沢東の相対的な位置と実相の証明となろう。

福建事変以後、紅軍は広昌において、ブラウン指揮により、国民党軍と戦闘を交える。ブラウンは1934年3、4月当時、建寧・広昌を戦略上の重要地点として守らねばならないと考えたのである。<sup>(71)</sup>しかし、国民党軍は圧倒的な空陸の火力の掩護のもと、1回に0.5～1 km ずつトーチカを前進させてくる。<sup>(72)</sup>これに対抗して紅軍も、城壁のない広昌に半永久的な陣地作りをしようという。しかし、味方の突撃（いわゆる「短促突撃」）、そして味方の陣地は、圧倒的な火力の前に全滅してゆくのであった。<sup>(73)</sup>

ここでブラウンの「短促突撃」論を検証しておきたい。ブラウンは近代戦をうたっているが、基本的には陣地戦、「守備」戦である。少数の守備で敵の飛行機や大砲をしのぎ、主力は短距離とはいえ勇気をもって積極的に突撃して、白兵戦を挑む、という、文字通りの「短促突撃」<sup>(74)</sup>（短距離強襲）でもあった。

ブラウンは毛沢東を、敵を深く誘い込む「遊撃戦一本やり」と批判する。<sup>(75)</sup>しかし、実はブラウン自身も「遊撃戦」を支持しているのである。もともと、彼の考える上策が敵の包囲網の突破であった。しかし、政治局や軍事委員会で、彼の案（第一案）も、また毛沢東の「敵を深く誘い込む」作戦（第二案）も退けられ、第三案としてブラウンが提出したのが「短促突撃」論であった。<sup>(76)</sup>積極的な「短促突撃」推進論者ではないことに注意したいのである。なお、『戦略問題』をみると毛沢東はソ区を放棄してでも浙江方面などへ転戦・展開することをいうのであった。一方、ブラウンの遊撃戦案も、（広昌において）南東あるいは南西部を突破し、迂回して「背後で敵を攻撃殲滅する」というものであ

<sup>(77)</sup>る。このへんまでは、毛沢東とも共通する面がある。ブラウンも、そうした遊撃戦で有利な状況を作るとか、敵のトーチカと歩兵との分断とはいふ。しかし、毛の遊撃論はそうした細かい勝利を積み重ねる戦略であるが、ブラウンのは、敵を消滅させるためには、主力部隊が陣地の前面で突撃を行うのである。そこでは、当然敵の飛行機や大砲の攻撃に晒される。従来の「敵を深く誘い込む」遊撃戦が敵のトーチカに通用しない、という認識のもと、求められるのは「高度の政治性」、それは勇敢に突撃することであり、全滅という事実が語るとおり、人的損害は折り込み済みの、広昌を死守するための特攻作戦だったとみるべきであろう。仮にブラウン自身には近代的な「高度の戦術」理論があったとして、それが「知的文化水準の低い」、火力も貧弱な紅軍をもってしては敵に通用しなかった時、それは一体誰の責任なのだろう。貧弱な紅軍しか持てず、正規戦に反対した毛沢東となるのであろうか。

なお、少し遡るが、それ以前の福建事変に対して、姫田光義氏は当時の指導部内に3つの情勢分析があったとしている。<sup>(78)</sup>上海の上級機関、毛沢東、そしてブラウン・秦邦憲の「臨時中央」、ということであろう。ブラウン・秦邦憲が、主力を福建北部に投入し、19路軍と協力して決戦の機会を求めるといふ戦略をもち、上海と毛沢東はそれに反対とされる。それなら、ブラウン・秦邦憲は、福建支援を主張した周・朱と同様の主張をしたことになり、周・朱の「前方総部」<sup>(79)</sup>を撤収したり、その前に主力を江西（永豊）に移動を命じた意味もわからないし、またそれを指示したのが誰なのかもわからなくなる。しかし、そのことの真偽を問うことがここでの目的ではない。戦況が二転三転するなかでの齟齬もあろう。ブラウンがすべて思い通り指示できたわけでもないにちがいない。いずれにしても三者の整理は難しいはずである。ここでの上海と毛沢東の関係はともかく、確かなことは、正規戦に反対である毛沢東が、福建への主力部隊の直接の援軍や、その後の江西での積極路線に賛成しない、言い換えれば、こ<sup>(80)</sup>こまでみてきたリスクなブラウンに反対するのは、むしろ当然だということである。しかし、問題なのはそのことではなく、ここから短絡的に、毛沢東は福建政府に反対であったという結論になることなのである。

もともと、漫然と加勢を送る（福建北部で国民党と決戦する）などというのは、

遊撃戦を戦ってきた紅軍（毛沢東）にとっては下策というほかない。だから、加勢しないことが、ただちに毛沢東が福建政府を全否定していたということを意味するはずがないではないか。毛沢東の『戦略問題』の主張は、もともと、福建と呼応した作戦をいうのであり、龔楚という、毛沢東に批判的な人物の証言も、毛沢東の主張を、19路軍がまず閩西北の国民党軍を消滅させるのに呼応して紅軍が福建を援助することにみていた<sup>(81)</sup>。そうすると、先の電報も、龔楚の証言も、『戦略問題』も、立場を異にしながら全く同じ方向（呼応、すなわち19路軍を先に動かし、紅軍はそれに「呼応」して行動する）を示しており、ここでも毛沢東が「積極路線」「軍事平均主義」に反対であったという、基本的な戦略・戦術論の立場の違いをいうだけに過ぎないことがわかる。毛沢東はブラウンには反対でも、福建政府に反対した（否定した）という実証はなにもないのである。福建政府を積極的に援助しなかったことが、あたかも5次「囲剿」戦の敗北の主要原因であり、遵義会議等で毛沢東がその敗北の責任を転嫁したかのようなニュアンスもみられる。それも遵義会議での敗者の弁である。しかしそれは、国民党軍の圧倒的な軍勢力を度外視した、木を見て森を見ない式の見解である。繰り返しになるが、毛沢東（『戦略問題』）の主張は、紅軍が19路軍に呼応して、江西から浙江方面へ展開すべき、ということである。

このようにみるとき、毛沢東が福建政府をどこまで信用していたかはともかく（非常に慎重ではあるものの）、戦略論で、福建と呼応して戦おうという毛沢東は、むしろ毛沢東流の積極論を展開しているのである。しかし、その毛沢東が福建政府を批判している（不信であったとみられる）というのはどういうことなのだろう。批判ということ自体が、そもそも誤りなのだろうか。いや、そうではない。福建政府が急ごしらえであるということのほか、重要な点で問題を抱えているのである。

そこで、改めて福建との協定にもどりたいと思う。協定は「反蔣反日初步協定」であった。ここで「反蔣」「反日」をうたう。福建政府はこの原則を遵守できていたのだろうか。福建事変の研究では、福建の反日や反蔣は自明（前提）で、本稿のような疑問にはならない。一方、従来の毛沢東研究では、ここでの毛沢東が「反日」「反蔣」という原則に立つことが、実は十分理解されて

いないのである。毛沢東は、後には19路軍を評価しているが（「日本帝国主義の策略に反対する（1935年12月27日）」（『毛沢東選集』第1巻131-2頁））、確かにこの時期の毛沢東の言説としては、水に落ちた犬を打つような福建政府への反革命批判などがみえる。<sup>(82)</sup>しかし、それは毛沢東の実際の（言説上の）批判とみるべきである。なぜなら19路軍は、「反日」だが、「反日反蔣協定」は秘密裡であり、上で若干見たように、国民党軍（蔣介石）とは直前まで接触があり、その旗幟を対外的には鮮明にしていない。事変後の行動も優柔不断にみえる。さらに毛沢東からみて問題なのは福建政府で、直前まで福建の日本軍とは、さしあたり協調路線であった。<sup>(83)</sup>『紅色中華』をみると、「福建独立後の近況」として、「反日反蔣」以下のスローガンが何も実現していないことを揶揄気味に伝えるのとあわせて、外交部長陳友仁が、8月3日に訪日して借款を求めたことを伝える。<sup>(84)</sup>このように、「反日」だが蔣介石とは通じる19路軍と、「反蔣」だが親日の福建政府が同体という、ヌエ的な性格があるからである。毛沢東には、福建政府を批判する材料がいくらでもあったといえる。しかし、福建政府にしてみれば、軍事同盟まで期待しているのに、その面では、紅軍（毛沢東）からは全く援助を得られておらず、逆にその紅軍（毛沢東）に決起を促されるといいう、その間の齟齬とともに、他方、蔣介石からは押しまわれ、日本とも対応しなければならぬ福建政府の不安定な立場はある。しかしそれにしても、とていうか、それゆえに、紅軍（毛沢東）からみれば、19路軍、そして福建政府の行動はチグハグなのである。こうした福建の事情を抜きにしては、先の「試験」にも合格しない「協定」の相手への毛沢東の反革命批判は理解できない、と本稿は考えるのである。ただし、こうした反革命批判だけを強調すべきではなく、逆に筆者の解釈や整理だけで、その反証になるわけでもない。このように一方で反革命批判をしながら、それにもかかわらず、毛沢東のほうにも、実際に福建と協定を結ばなければならない、差し迫った積極的な理由があるのである。

おわりに―「協定」から見えるもの

そこで本稿の主題である毛沢東の行動にもどりたい。福建事変のころ、毛沢

東は一方でこの福建政府を反革命といいながら、いったい何をしていたのだろう。従来の慎重論を一步進めてみたい。そこで注目すべきは、停戦協定とされる先の「協定」の内容である。

- (1) 双方の軍事行動の停止。境界線の画定。
- (2) 輸出入貿易を恢復。
- (3) 福建政府・19路軍は政治犯を解放する。
- (4) 福建省内の革命勢力の活動に賛同すること。言論結社集会罷工の自由を認める。
- (5) 反蔣宣言をし、軍事行動の準備をする。
- (6) 相互に全権代表を常駐させる<sup>(85)</sup>（以下略）。

先の三条件が(1)(4)でほぼ実現しているが、三条件では「民衆の武装」を謳ったものの、ここでははっきりしない。「革命勢力の活動に賛同」する程度では、明らかに後退している。実際、ブルジョア民主主義をめざす福建政府は、民衆レベルの行動には慎重で、その実行もされてい<sup>(86)</sup>ない。そこに福建政府の限界がみえる。しかし、上記の協定をみるかぎり、毛沢東はその点では無理強いしていない。当時の毛沢東は、(5)にあるように「反蔣」を明確に打ち出すが、19路軍・国民党员を含む「中間勢力」には寛容なのである。

むしろ本稿で主張したいことは、三条件にはないのに、「協定」では第2条にあげる「貿易関係」への言及である。一方では反革命よばわりしながら、現実にはこのように貿易関係を優先的に求めていたのである。従って、「初歩協定」としては、戦局の優位に立つ紅軍が停戦に応じ、一方紅軍は食糧は自給できても、塩・布などは欠乏しており、ここでは経済面での実をしっかりとっているのである。毛沢東は中央政府主席として、「経済建設」を行っていたのである<sup>(88)</sup>。もちろんこれは当面の革命戦争からみれば、二次的な仕事である。しかし、「経済建設」は単にそれだけではない。

（革命戦争のほかに）きわめて重要な一項目があり、われわれが今次力を入れて討論すべきことである。それは経済建設方面の工作である。われわれは猛然と経済建設運動を展開し、経済建設というこの任務を5次「围剿」を粉碎する最も基本的な条件のひとつとしなければならない—すなわ

ち、革命戦争に欠くことのできない物質的条件をもたらす（『毛沢東集』第3巻327頁）。

「革命戦争が当面の中心任務である」といいながら、経済建設事業はその革命戦争の「物質条件」を担うものであり、革命戦争と不可分のもの、とみるのである。国民党の経済封鎖に対し、経済政策は喫緊の課題であった。毛沢東は軍事面で路線闘争に敗れたが、ソヴィエト政府主席としては、経済政策面での福建政府との連携は渡りに船だったのである。

1930年代前半、毛沢東は国民党軍との5次にわたる「囲剿」戦をたたかい、1936年以降はこの戦略・戦術を整理して、「抗日期」の戦いに臨もうとするのであった。抗日についての論証は稿を改めなければならないが、1－4次「<sup>(89)</sup>囲剿」までは、毛自身は4次「囲剿」戦の第一段階途中から、前線にはいなかったが、毛沢東流の遊撃戦が展開し、正規戦が展開する5次「囲剿」の時期、毛沢東は軍務を外されていたが、一方で反日＝反蔣という原則論に立って福建政府を批判しながら、一方ではソヴィエト政府主席として、福建政府と積極的に協定を結んで連携を模索した。協定については『戦略問題』の記述の範囲を超えるが、『戦略問題』は基本的に当時の状況を正しく総括した戦術・戦略論であった。

民国史研究がすすみ、例えば蒋介石の一国リーダーとしての実像を明らかにする有力な論著がみられる一方、この当時の毛沢東の行ったとされる粛清などの暗部も明らかにされている。しかし、この時代の毛沢東の4、5次「囲剿」を指導した遊撃戦の思想とその行動を正しく理解し、反蔣・反日原則のもとに福建政府と対応する毛沢東の位置を改めて明確にしておくことは、民国史を考えるうえでも、あるいは近代史の多面的な見方の一つとしても、何ほどかは資するところがあるのではないかと念ずるものである。

## 註

- (1) 『毛沢東集』第5巻、北望社、1971年99頁。
- (2) 安都根「中国ソビエト革命史研究の現状と課題」『近代中国研究彙報』30号、2008年。
- (3) 高田甲子太郎「毛沢東戦略思想の源流—上—江西第一次反包圍討伐戦役の



推移」『軍事史学』15巻1、2号, 1979年。同「続・毛沢東戦略思想の源流—上—江西第二次反包囲討伐戦役の推移」『軍事史学』16巻1、2号, 1980年。河野収「毛沢東戦略思想の底流をさぐる—第二次反包囲討伐戦の観察—」『軍事史学』11巻4号, 1976年。中川昌郎「第四次反囲剿戦についての一考察—一九三〇年代の中国共産党」『共産主義と国際政治』6巻4号, 1982年。5次「囲剿」戦については、高田甲子太郎「福建事変と工農紅軍—江西第5戦役の軍事指導」『新防衛論集』9巻1号, 1981年。

- (4) 『毛泽东集』第5巻, 104-7頁。
- (5) 『毛泽东集』第2巻, 17頁。
- (6) 『毛泽东集』第5巻, 128-9頁。
- (7) 『毛泽东集』第5巻, 159-60頁。
- (8) 『毛泽东集』第5巻, 159-60頁。
- (9) 『毛泽东集』第5巻, 125頁。
- (10) 『毛泽东集』第5巻, 155頁。
- (11) 1次「囲剿」戦では、国軍4万4千に対して紅軍4万2千。2次「囲剿」戦では国軍11万余人に対し紅軍6万余人。3次「囲剿」戦では、国軍13万人に対し紅軍5万3千人。(王健民、『中國共産黨史』第二編、漢京文化事業有限公司, 1988年, 568, 573, 577頁)。なお、紅軍側では1次「囲剿」で、国軍10万、紅軍4万。第2次「囲剿」では国軍20万紅軍3万。第3次「囲剿」では、国軍30万紅軍3万とみている(何幹之など)。すなわち、「一をもって十にあたる」ものとなる。しかし王健民は国軍は総数をいって参戦の有無を問わず、紅軍は戦闘参加部隊に限っているとコメントしている(王健民、前掲書, 575-6頁)。
- (12) 60年代のジェローム・チェン『毛沢東』筑摩書房, 1971年, 158頁(Mao and the Chinese Revolution. London OXFORD UNIVERSITY PRESS, 1965, p. 176)。70年代の司馬長風『毛澤東與周恩來』南菁藝文社, 1976年, 39-40頁。そして80年代に入っても、4次囲剿への指揮は毛沢東から周恩来に移っており、従来の「敵を深く誘い込む」戦術から、ソヴィエト区外へ積極的に打って出る戦術になり、これがある程度成功したことが、5次囲剿への対応への道を開いたものとされた(中川、前掲書)。
- (13) 周恩来『周恩来军事文选』第1巻, 人民出版社, 1997年, 258頁。『周恩来年譜 1898-1949 (修訂本)』中央文献出版社, 1998年, 245-6頁。『朱德年譜』人民出版社, 1986年, 117頁。
- (14) 周恩来は31年12月末ソ区中央局書記として瑞金に着任、7月21日水口戦役以後前線に合流(『周恩来年譜, 219, 227頁』)。
- (15) 朱德『朱德选集』人民出版社, 1983年, 8頁。前年32年10月中旬、後に見る寧都會議で指揮権を奪われた毛沢東抜き、周恩来・朱德での作戦で、江西・福建に跨る建寧・黎川・泰寧(建・黎・泰)に「新ソ区」を建設することに成

- 功している(『周恩来年譜』236頁『朱徳年譜』112頁参照)。
- (16) 『周恩来軍事文選』第1巻, 258頁、『周恩来年譜』247頁、『朱徳年譜』117頁。
- (17) 曹伯一『江西蘇維埃之建立及其崩潰』國立政治大學東亞研究所, 1969年, 270頁。
- (18) 『朱徳選集』9頁。
- (19) 『周恩来軍事文選』第1巻, 260-1頁、『周恩来年譜』247頁。
- (20) 『周恩来軍事文選』第1巻, 268頁。曹(前掲書, 270頁)もほぼ同様の記述になっている。
- (21) 周恩来による積極路線をいうチェン自身、こうした戦闘が夜陰に紛れた待ち伏せであることを認めていた(チェン、前掲書, 159頁)。彼のいう「城門の向こうで食い止める」作戦に、なぜ夜陰に紛れた待ち伏せが必要なのか。中川氏が、「待ち伏せ」をペンディングにしたうえでなければ、4次囲剿全般として「敵を深く誘い込む」戦術が放棄され、「ソヴィエト区外」及びその境界へ打って出る戦術が取られたとはいえなかった(中川、前掲書)。因みに、チェンの根拠とする古貫郊「三十年來の中國」(亞洲出版, 60-1, 75-6頁)には、周一毛の路線対立をいうのみである。周が遊撃戦を時代遅れとみたという根拠はもともと示されてはいない。司馬長風(『毛澤東與周恩來』)も、ある人のからの伝聞としている。黄少群によると、それは鞏楚であり(黄、『周恩來』中央文獻出版社, 2006年, 432頁)、彼が紅軍總司令部で働いたのは1933年2月前後の2か月にすぎず、鞏楚『我與紅軍』(南風出版社, 1954年)をみると、その後の5次「囲剿」戦の開始当初、後に見る「短促突擊」という積極路線が成功した、といっているにすぎない(同書, 392頁)。チェン、司馬、中川などの研究には論拠がなかったのである。
- (22) 毛沢東の「敌大举进攻前部队向北工作一时期的训令(1932年9月26日)」(『毛沢東軍事文集』第1巻, 298-9頁)。(以下「訓令」という)は楽安・宜黄・(南豊)を第4次反围剿戦の最終決戦の場と予定していた。事実、ここでみてきた黄陂・東陂はともに宜黄県内であり、楽安・宜黄の中間に位置する。前年9月時点での朱・毛の路線、すなわち「訓令」とみごとに一致していた(黄少群「重评毛泽东同志对第四次反围剿战争的重要贡献」『上海师专学报』1982年、「中央苏区第四次反围剿战争述评」『求实』1984年ほか)。ここに戦略を構想した毛沢東と、それを実行に移した周恩来(そして朱徳)の連携が確認できる、と黄氏はみる。なお、矢吹晋『毛沢東と周恩來』講談社, 1991年, 73頁。
- (23) 沙可夫「社論」『紅色中華』第58期, 1933年3月6日。
- (24) 博古「為粉碎敵人的五次『圍剿』與爭取獨立自由的蘇維埃中國而鬥爭」『紅色中華』第99期, 1933年8月4日。
- (25) 曹、前掲書506頁。王健民、前掲書593頁。曹は10月17日から34年10月14日まで。王は10月16日からとする。

- (26) 王健民、前掲書、579頁。曹、前掲書、504頁。曹は34年1月開始とし、国軍の勢力は65個師、6個旅、6個団で、80万人とする。王は何幹之『中国現代革命史』という大陸資料に依拠する。
- (27) 1932年10月13日付「關於戦争緊急動員」『紅色中華』第36期、1932年10月16日、1933年1月28日「中華蘇維埃臨時中央政府工農紅軍革命軍事委員會宣言」『紅色中華』第48期、1933年1月28日など、政府主席の肩書で発言している。
- (28) オットー・ブラウン、瀬戸鞏吉訳『大長征の内幕』恒文社、1977年、80頁。
- (29) 蜂屋亮子「中国共産党史研究ノート」『アジア研究』20巻3号、1973年。早くに中革軍委への組織の一本化を指摘。
- (30) 姫田光義『中国革命を生きる』中公新書、1987年、81-2頁。ブラウンの証言を引いて、軍委の一本化と同時に、以下で見るように、「前方」での別組織をみるもの。
- (31) 『周恩来年譜』217頁、王建英『红军统帅部考实』（以下『统帅部考实』）广东人民出版社、2000年、109頁では1931年9月中旬。同『中共中央机关历史演变考实』（以下『演变考实』）中共党史出版社、2005年、188-9頁では9月下旬とする。
- (32) 王建英『演变考实』226頁。
- (33) 王建英『演变考实』232頁。
- (34) 『紅色中華』第78期、1933年5月11日。王建英『统帅部考实』153-4頁。『中央革命根据地史』人民出版社、1986年、464頁。舒龙『中华苏维埃共和国史』江苏人民出版社、1999年、231頁。中央革命軍事委員会が瑞金に移り、また項英が主席を代理することになり、博古と項英が委員会を取り仕切ったのである。
- (35) 姫田『中国革命に生きる』81-2頁。
- (36) 『周恩来军事文选』第1巻、289-290頁。
- (37) 『中国革命根据地史』470-1頁『中国革命根据地史稿』上海人民出版社、1986年、616頁。
- (38) 『紅色中華』第149期、1934年2月14日。
- (39) 『王明選集』第3巻、汲古書院、1973年所収。
- (40) 『王明選集』第3巻、334頁。
- (41) コミンテルンのミフあるいは王明の毛沢東への支持については、「共产国际执行委员会政治书记处给中共中央的电报」（1933年3月19日-22日）『联共（布）、共产国际与中国苏维埃运动』第13巻）罗平汉「宁都会议后毛泽东与中共临时中央的关系（上）理论视野2010年（11）。日本では、同時期を対象とした北田定男「江西ソビエトにおける反羅明路路線闘争」『アジア研究』20巻3号、1973年。
- (42) ブラウン、前掲書、58頁。
- (43) 本庄比佐子「福建事変と中国共産党」『近代中国研究センター彙報』15号、1971年。「福建事変における「反日反蔣の初步協定」について」『東洋学報』66巻1-4号、1985年。それとは別に高田甲子太郎氏により福建事変の戦略面の

分析もなされていた（高田甲子太郎「福建事変と工農紅軍」『新防衛論集』9巻1号, 1981年）。

- (44) 『蔡廷鍇自传』黑龙江人民出版社, 1982年, 233-270頁。
- (45) 同書265-6頁。
- (46) 同書268頁。
- (47) 同書296頁。
- (48) 塘沽協定 については、この協定をもって満洲事変が終結したとする臼井勝美『満洲事変』中公新書1974年、満洲事変から一貫した対中国侵略の意図として位置付ける江口圭一『十五年戦争研究史論』校倉書房2001年、現地解決をめざす「塘沽協定体制」が日中全面戦争を導いたとする古屋哲夫『日中戦争』岩波新書1985年、同様に柳条湖から盧溝橋への連続性を華北に即してみる安井三吉『柳条湖事件から盧溝橋事件へ』研文出版2003年、塘沽協定を日中双方の視点でみる坂野良吉「塘沽協定の多面的性格」『上智史学』51号2006年などがあり、それらを踏まえ、さらに外務省側の視点から陸軍の動きを見据えた山口真理子「塘沽停戦協定の研究」『社学研論集』21号, 2013年がある。
- (49) 黄少群『周恩来』342頁。
- (50) 『紅色中華』第41期, 1932年11月21日。
- (51) 『紅色中華』第52期, 1933年2月13日、85期, 1933年6月14日など。
- (52) 『紅色中華』第67期, 1933年4月8日。69期, 1933年4月14日。
- (53) 『彭德怀自述』人民出版社, 1981年, 180-1頁。
- (54) 蔡廷鍇「回忆十九路军在闽反蒋失败经过」『文史资料选辑』第59辑, 中华书局出版, 1979年, 86頁。
- (55) 『毛泽东集』第3巻, 183-4頁。
- (56) 「三条件」そのものは王明路線とされる（蜂屋亮子「ソヴィエト革命期の抗日問題における王明路線」『高木・石井編『中国の政治と国際関係』東京大学出版会, 1984年）。丹念な仕事であり、この見解を支持する。本稿の問題ではないが、ここには「抗日」の主張が毛沢東ではなく王明だとする考えがみえる。
- (57) 『毛泽东集』第4巻所収。
- (58) 王健民、前掲書, 602頁。
- (59) 姫田、『中国革命に生きる』164頁。
- (60) 吴明刚『福建事变始末』湖北人民出版社, 2006年, 209頁。
- (61) こうした内容はすでに『紅色中華』143期, 1933年12月8日にある。
- (62) 『紅色中華』第145期, 1934年1月19日。
- (63) 黄少群『毛泽东与红军』第2巻, 235頁。
- (64) 『周恩来军事文选』第1巻, 311-312頁。
- (65) 『周恩来年譜』260-1頁。
- (66) 『周恩来军事文选』第1巻, 314-315頁。

- (67) ここでの戦術を彭徳懷は自分の提案としている。彭徳懷は、兵力を集中して「閩浙贛辺地区」すなわち蒋介石が根拠とする南昌の東側の省境を根拠地に南京・上海・杭州などを威嚇して19路軍を支援しようというもの（『彭徳懷自述』人民出版社, 1981年, 184頁）。戦術自体はすでに毛沢東が「対政治沽量, 军事战略和东西路军任务的意見」（1932年5月3日）（『毛泽东军事文集』第1巻, 271-2頁）で述べているが、いずれにしても、彭徳懷の提起も「臨時中央」の採るところではなかった。
- (68) 『毛泽东集』第4巻, 389頁。
- (69) 毛沢東の党中央との確執および毛沢東の一貫性を先駆的に論じたものに蜂屋亮子「中国共产党蘇区中央局成立と毛沢東」『アジア研究』17巻1号, 1970年。王順生『福建事变』福建人民出版社, 1983年。吴明刚、前掲書。
- (70) 「日本帝国主義に反対する策略を論ず」（1935年12月27日）はこの趣旨を述べる（『毛泽东选集』（人民出版社, 1966年, 第1巻, 131-2頁）。共産党と19路軍をつなぐ近年の「第三党」の抗日ナショナリズム研究もまた、そのかんの事情をよく説明している（周偉嘉『中国革命と第三党』慶應義塾大学出版会, 1998年, 156-181頁）。
- (71) ブラウン、前掲書, 78頁。
- (72) 『彭徳懷自述』190頁。『紅色中華』第164期, 1934年3月20日。
- (73) 『彭徳懷自述』189-1頁。『紅色中華』第184期, 1934年5月4日。
- (74) ブラウン「革命戦争の迫切問題」、同「論紅軍在堡壘主義下の戦術問題」（『革命與戦争』第2, 3期）。黄少群（『毛泽东与红军』242頁）のいうとおり「冒険主義」「防御中保守主義」というのがあたっている。
- (75) ブラウン、『長征の内幕』86頁。
- (76) ブラウン、『長征の内幕』110頁。
- (77) ブラウン、『長征の内幕』110頁。
- (78) 姫田、前掲書, 120-2頁。
- (79) 周恩来・朱徳も全軍による決戦を提起していたとされる（『周恩来军事文选』第1巻312頁の注、『周恩来年譜』260頁）、筆者は毛沢東と周・朱は、意見は違っても連携しているとみるものであり、決戦提起という『文選』注釈者、『年譜』編集者の見方に必ずしも同調するものではない。むしろ、兵力を集中して敵の弱点をねらうものとするべきである（黄小群『周恩来』353頁『毛泽东与红军』257頁）。いずれにしても、ねらいがちがうからこそ、ブラウンと周・朱とは福建支援では一致しても、共闘できなかったと考えるべきである。
- (80) 姫田氏は、ブラウンの「短促突撃」論に関連して、ここで毛沢東が「深く敵を誘い込む」戦法に固執し、敵の包囲網を突破して、トーチカの背後に回るというブラウンの主張に、毛沢東が反対したとされる（「オットー・ブラウンの「短促突撃」論をめぐる」『中国の政治と国際関係』東京大学出版会, 1984

年)。

- (81) 龔楚『我與紅軍』397頁。
- (82) 例えば「关于中央执行委员会报告结论（1934年1月27日）『毛泽东集』第4卷284頁。
- (83) 本庄、「福建事变と中国共産党」。また、橋本浩一氏が「福建人民日報」などの資料により、打倒蒋介石を最優先とし、日本とも協調路線をとったこと。一方日本も、福建独立を中國の内政問題としたこと、外務省は「不干涉」。陸軍は一部に「南進」の足場としての思惑はあったものの、基本的には外務省と共同歩調をとったことを論じている（橋本「福建人民革命政府の對外政策と日本の動向」(上)(下)『中国研究月報』57巻11、12号, 2003年。
- (84) 「福建独立後の近況」「福建新政府对日借款問合せ」『紅色中華』第133期, 1933年12月8日。
- (85) 『紅色中華』第149期, 1934年2月14日。
- (86) 本庄比佐子「福建事变における「反日反蔣的初步協定」について」。
- (87) 蔡も33年春に国民党が規定した「經濟封鎖」を解除して、ソ区に塩、布、医薬品、器材などを供給したという（蔡廷鍇「回忆十九路军在闽反蔣失败经过」87頁）。
- (88) 例えば「中華ソヴィエト共和国中央執行委員会と人民委員会の第二次全国ソヴィエト代表大会への報告」（1934年1月24-25）（『毛泽东集』第4卷所収）。
- (89) 拙稿「ソヴィエト期における毛沢東の抗日論に関する一考察」『佛教大学大学院紀要 文学研究科篇』第43号, 2015年3月1日。